

来日公演
迫る!

サカリ・オラモ指揮 ケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団

ヴァイオリニスト 諏訪内晶子に訊く

2025年2月に来日ツアーを行うサカリ・オラモ指揮 ケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団。2月12日公演では、ソリストに国際的な活躍を続けるヴァイオリニスト 諏訪内晶子を迎え、ブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番を披露する。日本ツアーに先駆けて、現地ケルンのフィルハーモニーホールでのケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団との共演を前に諏訪内晶子に話を訊いた。



©Kiyotaka Saito

「2月のケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団とのツアーで演奏する『ブルッフ・ヴァイオリン協奏曲第1番』は、1996年のデビューアルバムで収録されています。この曲にどのような思い入れや、思い出がありますか?」

「この曲は、私が最も長い間演奏している楽曲の一つです。もちろん、これまでの経験に伴い、演奏はかなり変わってきました。」

「ロマン派の伝統に深く根差すこの作品は、何と言ってもその旋律の美しさとヴァイオリン演奏技術が、バランス良く融合された作品ではないでしょうか。」

「この協奏曲が初演された後、私の母校の一つであるベルリン芸術大学を創立したヨアヒム・シュタウプにより、改訂されたそうです。後には、ブルッフ自身も同芸術大学で教鞭をとっていたので、伝統の素晴らしさを身近に感じます。」

「2月のツアーでも、名器ゲアルネリ・デル・ジェズで演奏が予定されています。いまこの楽器で弾くブルッフでは、これまでとどのような違いがイメージされますか?」

「深みのあるあたたかい音色が、特徴的な楽器です。この楽器に持ち替えてから、以前から使用していた弓を変え、その特徴的な音を最大限引き出せる様、日々考えています。また、この楽器は特にヴィヴァートの波が伝わりやすいため、以前とはかなり違う方法で演奏しています。楽器によって響く音域が全く異なるため、例えば一つのフレーズでも、細かく弾き方を変えなければなりません。」

「サカリ・オラモ氏とは過去に録音も。オラモ氏はどのような指揮者でしょうか? その魅力は?」

「サカリさんご自身がヴァイオリニストでもあるので、共演



©Benjamin Ealovega

サカリ・オラモ(指揮)

しやすい指揮者の一人です。綿密な解釈をベースに、オーケストラを歌わせる事が得意で、音のバランスに気を配る指揮者ではないかと思えます。15年ほど前に、別のオーケストラ(ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー)とブルッフを共演し、絶妙な間で音楽作りをして下さったので、また一緒に出来る事が、今から大変楽しみです。」

「2024年12月にケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団と細川俊夫のヴァイオリン協奏曲『ゲネシス(生成)』の演奏が予定されています。このオーケストラに対してどのような印象がありますか?」
【※注:裏面にて音楽ジャーナリスト中村真人さんによる現地レポートもお読みいただけます。】

「ケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団は、マーラーの交響曲5番やブラームスの二重協奏曲の初演を行なったオーケストラであり、R・シュトラウスのヴァイオリン・ソナタは、このオーケストラのコンサートマスターによって初演されるなど、伝統のある楽団です。15年以上前から、既に何度か共演を重ねていますが、最初に共演した時、楽屋に飾ってあった写真を拝見し、その歴史の重みに感動した事を、鮮明に覚えています。」

「現代曲も積極的に取り上げる楽団で、豊かな音色で柔軟な演奏をするオーケストラではないでしょうか。」

「細川俊夫さんの『ゲネシス(生成)』は、自然や生命の持つ静寂さ、緊張感とエネルギーが描かれています。詩的で繊細でありながらも時には厳しく、舞台上で音が生命力を得て、哲学的とも言える空間をオーケストラとソロヴァイオリンが共鳴し合いながら、進化していく様に感じられる作品です。」

「2月の日本ツアーでは、ケルン生まれの作曲家ブルッフの作品をギェルツェニヒ管弦楽団とサカリ・オラモ、そして諏訪内晶子がどのような音楽を創り出すのか、期待が高まる。」

裏面では12月8日の現地レポートもぜひご覧ください!

解き放たれた

シンフォニックコンサート“ENTFESSELT”

現地公演レポート

中村真人 (音楽ジャーナリスト / ベルリン在住)

12月8日の朝、ケルン中央駅から外に出ると、目の前に大聖堂の姿が目に見え、天に向かってそびえる巨大な教会に圧倒されながらも、クリスマス前の街の雰囲気と相まって、華やいだ気分になる。ケルンを中心とするこの地域のびとの芸術や精神世界に大きな影響を及ぼしてきたのが、この大聖堂であり、「父なるライン」だろう。ケルン・フィルハーモニーが大聖堂とライン川の間の最高のロケーションに位置するのも、そのことを示している。



この素晴らしいホールで、ケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団のマチネー公演を聴いた(指揮はオスモ・ヴァンスカ)。1827年に創設された歴史豊かなオーケストラであり、ブラームス、マーラー、R・シュトラウスといった大作作曲家の作品を初演するなど、同時代の音楽を育んできたことでも知られる。

その姿勢はこの日のプログラムにも現れていた。冒頭に演奏されたのは、ケルン在住の作曲家ヨーク・ヘラーの80歳を記念した委嘱作品《序奏と最後の調べ》。やはりケルンに縁の深いロベルト・シューマンの幻想小曲集の第3曲《なげに》とワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》第3幕への前奏曲のモチーフを取り入れた、内省性の高い作品だ。

続く細川俊夫のヴァイオリン協奏曲《ゲネシス(生成)》には、諏訪内晶子がソリストとして登場した。2021年に初演された、人の命の生成をテーマに書かれた作品であり、作曲家が羊水をイメージしたというオーケストラによる冒頭から、聴き手は生命誕生の神秘に立ち会うことになる。自然や宇宙を表現するオーケストラに対し、ヴァイオリン独奏は生まれ、成長してゆく人の命をかなでる。

まず、この作品を初めて演奏するとは思えないほど、オーケストラが達者だ。最初のヘラー作品でも感じたことだが、響きが透明でにこらない。対する諏訪内の凛とした佇まいのソロも実に美しい。2つ目のカデンツァでは、ヴァイオリンが尺八を模したようなフルートとチェロの独奏と絡み合い、響きの強度を深めてゆく。ヴァイオリンとオーケストラは対立し、反発し合うものの、やがて和解がおとずれる。極小の高音を奏で続ける諏訪内のヴァイオリン・ソロに、

鳥の歌のようなピッコロやクラリネットがやさしく寄り添い、音楽はほのかな余韻を残して消えた。

細川は、人間と自然というテーマの上に戦争という最も野蛮な行為を警告した続編にあたるヴァイオリン協奏曲《祈る人》をその後に書いたが、2023年のベルリンでの初演に立ち会っている筆者は、2つの作品を重ね合わせながら平和を祈らずにはられない気持ちになった。

後半は、ベートーヴェンの交響曲第7番。プログラムによると、ギュルツェニヒ管弦楽団がこの曲を演奏するのは、意外にも10年ぶりとのことだ。ベートーヴェンがウィーンで書いた作品とはいえ、このオケにとっては「我が交響曲」という意識が強いのではないかと。何しろベートーヴェンはここからライン川の上流30キロ弱行ったところのボンで生まれたのだから。

フィンランドの名指揮者オスモ・ヴァンスカは、かつて手兵のラハティ交響楽団とのシベリウスを聴いて以来だろうか。舞台上に登場したときは、さすがに歳を召された印象は否めなかったが、これがなかなかどうして、第7番にふさわしい生き生きとした舞踏を奏でる。特に第1楽章の主部に入ってから、意気揚々と心地よい開放感に満たされた。ベルリンからやって来た筆者には、北ドイツのオーケストラとは響きの傾向が違うことに気づく。前半で聴かせたアンサンブルの折目正しさはそのままだが、くっきりと明るい響きだ。全曲ほとんどアタックで演奏するテンポのよさもあり、終楽章ではオーケストラのエネルギーが指揮者によって束ねられ、フィルハーモニーは幸福な歓喜に満たされた。

ホールを出ると、この季節には珍しく青空が広がっていた。大聖堂の真下のクリスマスマーケットは賑わいを見せ、ライン川のほとりでは多くの人が散歩を楽しんでいる。星の数ほど解釈の可能性があるベートーヴェンの交響曲だが、この作曲家が22歳まで過ごしたライン地方を代表するオーケストラの第7番には格別の味わいがあった。2025年初頭の来日公演でも、彼らがその風土と歴史の中で育んできた音をそのまま届けてくれるに違いない。



サカリ・オラモがケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団のアーティスティック・パートナーに就任!!



© Benjamin Ealovega
サカリ・オラモ (指揮)

サカリ・オラモが、2025/26シーズンから同団のアーティスティック・パートナーに就任することが発表されました。オラモがケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団と初めて共演したのは2023年3月。今回の5年間のパートナーシップ契約ではシーズンごとの2回の定期演奏会出演が含まれており、オラモは同団の伝統的なクラシックレパートリーのみならず、北欧の現代作品演奏を取り入れることにも意欲を見せています。カペルマイスター兼音楽総監督に就任するアンドレス・オロスコエストラダからも熱烈な歓迎を受け、エストラダは、『優れた指揮者を獲得できたことを嬉しく思います。』と述べており、同団も『指揮者との相性が最初から合うことは稀で、今後のパートナーシップに大変喜んでおり、彼と私たちのオーケストラと一緒に素晴らしい演奏を創り出すことを楽しみにしています』と語っています。新たな時代を迎えるサカリ・オラモとケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団のコラボレーションを聴ける来日公演に期待が高まります。

サカリ・オラモ指揮 ケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団 諏訪内晶子(ヴァイオリン)

2025年2月12日(水) 19:00(18:20開場) サントリーホール
ウェーバー：歌劇「オベロン」序曲 J.306
ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 Op.26 [ヴァイオリン:諏訪内晶子]
ベートーヴェン：交響曲 第7番 イ長調 Op.92
 S席¥18,000 / A席¥16,000 / B席¥14,000 / C席¥ **売切** / D席¥ **売切** (税込)

【その他のケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団 日本公演スケジュール】

- 2月9日(日) 所沢市文化センター ミューズ ☆
- 2月10日(月) サントリーホール ☆
- 2月11日(火・祝) ザ・シンフォニーホール ★
- 2月13日(木) 東京オペラシティコンサートホール ☆
- 2月15日(土) 豊田市コンサートホール ★
- 2月16日(日) 横浜みなとみらいホール ☆

ソリスト
 ☆ 藤田真央
 ★ 諏訪内晶子